

【特別寄稿】

信大国語教育学会の休会に寄せて

山本 亮介

信州大学から異動して早や九年目に入りました。毎年お送りいただく『信大国語教育』と大会開催のご案内をとおして、先生方のご研究の一端、大学院生・学部生のみなさんの学修成果、卒業生の方々のご活躍などを楽しみに拝見しておりました。

教員として関わった期間で、まず思い起こされるのは、当時の大学院生のみなさんです。各自の研究を進める傍ら、学会運営・機関誌編集に携わっていただいた院生たちには、本当に頭が下がるばかりでした。この文章を書きながら、学会関係の事柄を院生室で折々に話し込んだ記憶が、それぞれの顔とともに蘇ってきます(みなさん、元気に過ごしているでしょうか)。学会の活動を繋いできた歴代の大学院生のご尽力に、改めて感謝いたします。学会という場で(研究)に触れる学部生の様子も忘れられません(みなさん、元気に過ごしているでしょうか)。

普段の授業とは少し違った雰囲気、大会での発表・報告に臨む姿。機関誌への論文掲載を打診された学生たちが、うれしさと重責からか何とも言えない表情を浮かべること。そうした小さな、でもとても大切な出来事が、信大国語教育学会の歩みに積み重ねられているものと思えます。

最後になりましたが、長きに渡って学会を支えてこられた先生方に、この場を借りてお礼申し上げます(みなさん、……ともに元気に過ごしましょう！)。

(やまもと りょうすけ 東洋大学)